

農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)



営農総合センター 営農指導課 (072-444-8001)

野菜

たまねぎ



病害虫防除
曇雨天の日が続くと、べと病や白色疫病の発生が多くなる。常発地や排水の悪い場合は要注意である。溝を切って排水を良くするなど、耕種防除に努める。発病を認めた場合は表1のいずれかの薬剤を散布する。また、白色疫病が発生した株は灰色腐敗病を併発しやすいので注意する。灰色腐敗病は表1のいずれかの薬剤で予防する。

さといも

◆施肥

定植は3月下旬～4月下旬に行なう。定植の2週間以上前に、苦土石灰を10a当たり80～100kg施し、荒起こしをしておく。元肥は、定植の1週間程度前にチッソ・リン酸・カリを各成分で、10a当たり14～15kg施用する。生育後半の肥料切れを防ぐため、緩効性肥料を中心にすると良い。

◆植え付け

種いもの芽が2～3cmぐらいに伸びた頃、10cm程度の深さに植え付ける。砂壤土ではやや深く、粘質土ではやや浅くする。植え付けの際には、種いもの大・中・小に分別し、大きいものか

しゅんぎく

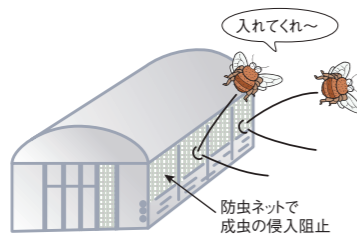
◆病害虫防除

マメハモグリバエの吸汁による被害が多くなる時期であるため、それを防ぐために、表6のいずれかの薬剤を害虫発生初期に使用する。

軟弱野菜

◆ハウスの病害虫防除について

ハウス栽培ではハウス内への害虫の飛び込みを防ぐため、ハウスサイドやハウスの出入り口に防虫ネットを被覆すると効果がある(図)。



(図)ハウスのサイドや出入り口など、ハウスの開口部にネットを被覆

1mm目合いのネットが有効な作物と害虫

作物名	害虫名
なす、トマト、菊	アブラムシ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類、オオタバコガ、ヨトウムシ類
しゅんぎく	アザミウマ類、ハモグリバエ類、ヨトウムシ類
こまつな 大阪しろな	アブラムシ類、コナガ、ヨトウムシ類、ハイマダラノメイガ、ハモグリバエ類

5mm目合いのネットが有効な作物と害虫

作物名	害虫名
なす、トマト、菊、 軟弱野菜、花き類	オオタバコガ、ハスモンヨトウ、ヨトウムシ、シロイチモジヨトウ

表1 たまねぎの病害に登録がある農薬

病害名	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
べと病 白色疫病	リドミルゴールドMZ	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	100～300ℓ/10a
	ランマンフロアブル	2000倍	収穫7日前まで	4回以内	100～300ℓ/10a
灰色腐敗病	ベンレート水和剤	2000～3000倍	収穫前日まで	6回以内	100～300ℓ/10a
	アフェットフロアブル	2000倍	収穫前日まで	4回以内	100～300ℓ/10a

表2 なすの灰色かび病に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
フルピカフロアブル	2000～3000倍	収穫前日まで	4回以内	100～300ℓ/10a
ベルコート水和剤	3000倍	収穫前日まで	3回以内	150～300ℓ/10a
カンタスドライフロアブル	1000～1500倍	収穫前日まで	3回以内	100～300ℓ/10a
アフェットフロアブル	2000倍	収穫前日まで	3回以内	100～300ℓ/10a

表3 なすのすずかび病に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
トリフミン乳剤	2000倍	収穫前日まで	5回以内	100～300ℓ/10a
ラリー水和剤	4000～6000倍	収穫前日まで	4回以内	150～300ℓ/10a
ベルコート水和剤	3000倍	収穫前日まで	3回以内	150～300ℓ/10a
ダコニール1000	1000倍	収穫前日まで	4回以内	100～300ℓ/10a

表4 ほうれん草のべと病に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	3回以内	100～300ℓ/10a
Zボルドー	500倍	—	—	100～300ℓ/10a

※Zボルドーは、野菜類で登録がある。
※一般的に高温時のZボルドー(銅剤)散布は、葉害の発生を招く恐れがあり湿度条件にも注意が必要である。一定の温度下(26℃)では、湿度が高まると葉害の発生が増加する。低湿度条件下(湿度70%)では、湿度は葉害の発生に大きく影響しないが、高湿度条件下(湿度85%)では、温度の上昇とともに葉害の発生が多くなるので注意する。
※Zボルドーは、ほうれん草に使用する場合は、葉の汚れを生じるので、収穫間近の散布は避ける。

表5 こまつなの白さび病に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	3回以内	100～300ℓ/10a
ライメイフロアブル	2000～4000倍	収穫3日前まで	3回以内	100～300ℓ/10a

※ランマンフロアブル、ライメイフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。

表6 しゅんぎくのマメハモグリバエ防除に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
アフーム乳剤	2000倍	収穫7日前まで	2回以内	100～300ℓ/10a
カスケード乳剤	2000～4000倍	収穫7日前まで	2回以内	100～300ℓ/10a

ら順に植え付ける。
◆マルチング
定植後はできるだけ早く黒マルチをかける。
発芽後、マルチの穴あけが遅れると芽が焼けるので、遅れないように注意する。

水なす

◆病害虫防除

ハウス栽培では、灰色かび病やすずかび病の発生に注意する。特に曇雨天の日が続くと天候不順の場合は、葉が軟弱になり病気の発生が多くなりやすいので、日中は換気に努め、ハウスが過湿にならないように注意する。
発病した葉や果実は見つけ次第、ハウスの外に持ち出して処分する。

ほうれん草

◆は種

ほうれん草の花芽分化は長日、低温によって誘起されるため、3月以降は、春まき用の晩抽性品種を用いる。
◆病害虫防除
降雨が続くと、べと病の発生が多くなる。抵抗性のある品種

分する。薬剤防除を行なう場合は、高温時を避け、晴天の日の午前中に行ない、夕方ハウスを閉めるまでに散布した薬液が乾いているようにする。ハウス内が高湿になる時には、葉害の恐れがあるので注意する。
薬剤については表2、3を参考にし、系統の異なる薬剤を選びローテーション散布する。

重要である。2回に分けて施用する場合、みかん配合(チッソ8・リン酸5・カリ6)を1回目(2月下旬に10a当たり100kg、2回目は3月下旬に10a当たり50kgを施用する。できれば施用後に軽く中耕する。
なお、表年で着花量が多いと予想される園では、施用時期を通常よりも早くして、新梢の発育を促す。

もも

◆病害虫防除

縮葉病は3月下旬以降の発芽・展葉期に雨が多く、風当たりの強い園地で多発しやすい。発芽前に石灰硫黄合剤(7倍/発芽前/1)を散布する。また、3月中旬にはチオソックフロアブル(500倍/収穫7日前まで/5回以内)を枝先にも十分かかるように散布する。
なお、せん孔細菌病の防除を目的にカスミンボルドー(500倍/開花前まで/3回以内)を散布する場合には、石灰硫黄合剤(7倍/発芽前/1)との散布間隔は2週間程度あけるようにする。
※石灰硫黄合剤は、メーカーにより登録内容が異なるため、ラベルを確認して使用する。
◆摘蕾
ももは着果数の20～30倍の花

いちじく

◆霜害対策

春先は遅霜などの被害を受けやすくなる。そのため巻いているわら等を外す時期が早すぎないように注意する。敷きわら・マルチを早く引きすぎても霜害が起きやすくなるため注意する。
◆病害虫防除
ネコブセンチュウの被害により樹勢が低下している園では、3月下旬にネマトリンエース粒剤(10a当たり20kg/収穫60日前まで/1回)を樹冠下に散粒処理する。敷きわらやマルチを敷く前に散粒し、降雨の後に、敷きわらやマルチを敷くようにする。

果樹

◆せん定

昨年が表年の園では、本年は裏年と予想されるので、間引きせん定(枝の分岐部から切る)を主体とする。結果母枝を出るだけ多く残すようにするため、せん定量は少なくし、日陰を作る枝を整理する程度が良い。また、昨年が裏年だった園や樹によってバラッキの園は、樹の状態をみてせん定量を判断する。

◆間伐・縮伐

密植園では間伐が重要。隣の樹と枝が触れ合っている状態であれば、必ず間伐や縮伐を行なう。
◆春肥の施用
春肥は新梢の発生や充実、開花後の結実や幼果の肥大促進に

*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。